

ゴッホ展 ―響きあう魂へレーネとフィンセント

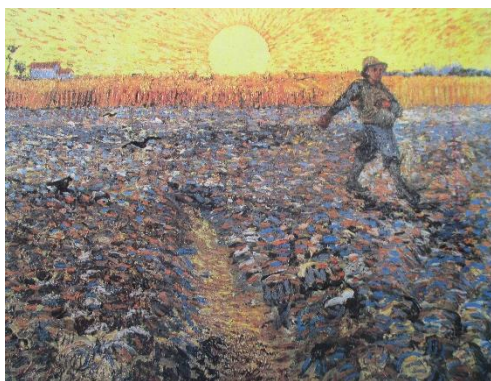
東京都美術館 21. 09. 18～12. 12

福岡市美術館 21. 12. 23～22. 02. 13 名古屋市美術館 22. 02. 23～04. 10

「ヘレーネ・クレラー＝ミュラー」は、「ゴッホ」が評価の途上であった20世紀初頭に、夫とともに「約90点の絵画」と「180点を超える素描・版画」を収集し、後に設立した「クレラー＝ミュラー美術館」の初代館長に就任した。

「フィンセント・ファン・ゴッホ」(1853～1890)は、オランダのポスト印象派の画家で、主要作品の多くはフランス・アルルの居住時代とサン＝レミでの療養時代に制作された、感情の率直な表現に大胆な色づかいで知られている。

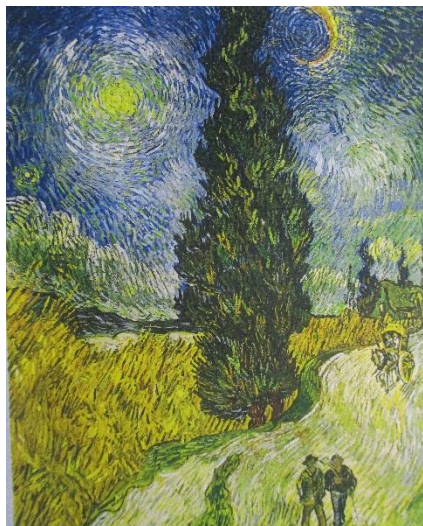
《沈む太陽と種をまく人》(ミレー風) 1888年 油彩/カンヴァス



画伯のアルル時代の初期の創案に基づいて描かれた数少ない人物画で、モチーフは“昇ってくる太陽の驚くほどの鮮やかで黄色の大胆な色彩と、他の色彩の激しい位置”が独特の絵画である。

主題は、ミレーの《種まく人》であるが、太陽を大きく中央に描いた大胆な構図と色彩で描かれて、ポーズを青い上着と白いズボン姿に変えて、空は黄緑色で地面は橙色で描かれている。

《夜のプロヴァンスの田舎道》 1890年 油彩/カンヴァス



画伯の南仏滞在時代の集大成ともいえる傑作で、作品別名は《男たちの歩いている道》《星月夜と糸杉のある道》とされている。

大きな糸杉をはさむように配された星と月、二人連れの男と後方には彼らに乗せた馬車が一台描かれたモチーフは、一体何を表わそうとしているのだろうか。プロヴァンスを象徴するモチーフとして「糸杉」を選んだ絵画は、消え入ろうとする「星月夜」で、夜空はそれほど波打たず、糸杉も落ち着いて地面も同じような磁場の草原とともに流れている。

東京新聞 2021. 09. 13 に「ゴッホ展とクレラー＝ミュラー美術館」についての解説記事が大々的に掲載されている。